

ワーク・ライフ・バランス推進に必要なこと

やまぐち ようこ
山口 洋子 連合・副事務局長

昨年のこの号にもワーク・ライフ・バランスにたいする所感を述べたと記憶している。このシーズンはまとまった休暇を過ごした後、多少オン・オフが緩くなっているためか、あらためて「ワーク・ライフ・バランス」に思いをはせる。

昨年の「New Wave」を機に、ワーク・ライフ・バランス実現に向けて実行していることがある。出張の際、少しの時間でも観光等現地を味わうことにした。様々な場所に出かけても駅あるいは空港との往復+どこも同じ夜のネオン街のみというパターンを壊して、事前に情報収集をし、目的を明確にして効率的に計画をした。その結果昨年は、金比羅大神宮、永平寺、札幌農学校（クラーク像のあるところ）、モネの庭等多くの場所を知ることができ、私のライフはかなり充実した。

ワーク・ライフ・バランスの推進にはイノベーションが必要であると思う。たとえ今がワーク・ライフ・アンバランス（仕事と生活の不調和）の状況であっても、その先にあるべきバランスがあるとしても、努力して現状を変えるより今のままでよいと思いがちではないか。少なくとも私の知人はそうである。

彼は2年前会社を定年退職したが、その昔、労働組合がなかったその会社に労働組合を立ち上げるべく、ただ一人奔走した。組合結成後も組合に対して何かと否定的な会社と対峙し、労働組合の力でまっとうな会社に進化させていったという、多くの逸話を残すようなユニオン・ヒーローだった。その彼を支えていたのが、毎

日帰宅の遅い、あるいは帰らない夫を常に待ち、帰ったときには靴下まで脱がせて、夫に尽くすことが我が人生と心底思っていた妻だった。しかし、彼が激動の労働組合委員長時代を終え、少しは穏やかな日々を送れる頃に彼女は病に倒れ、早すぎる死を迎えてしまった。

その後の彼は妻のところへ行きたいと口走るほど弱い人になってしまったが、まわりの彼を慕う後輩達が必死で彼を支え、危険状況を脱した。ところが今の彼には何か抜けてしまっているようで、毎日の食事は肉が4枚ほど挟まれているハンバーガー、宅配ピザ、マンション近くのカレー店でのカツカレー等が主流で、かつて精悍でダンディとも言われた姿が、0.1トンのメタボ。「世の中では男性の料理が人気だからトライしてみたら」、「歩くことは健康にとても良いんだって」、「W i i F i tが面白いらしいよ」、「旅行はどう？」といった私たちの声は「そんな難儀なことようせん」と一蹴されてしまう。このようなやりとりを2年間続けているが、いつも完敗している私たちである。

ワークが無くなったらライフが充実するかと言ったら必ずしもそうではなく、やはりオン・オフ、仕事と生活があってそのバランスに妙味があるのだ。また、自立するという意味も含めて日々小さなイノベーションの積み重ねがバランスを可能にするのだと実感させられる体験である。彼の今後が輝かしいゴールデン・エイジになるような助言、イノベーション案があったら是非お聞かせいただきたい。